

*** キリスト教学特殊講義 1 * * * * ***

S. Ashina

第1講: 聖書 - キリスト教思想の源流 -

第2講: 古代 - キリスト教教理の形成過程 -

第3講: 中世・宗教改革 - 教理の展開過程 -

1. 啓示神学と自然神学 2. 罪と sacrament 3. 宗教改革の意義

2. 罪と sacrament

1. キリスト教的罪論の特徴

- ・エデン神話における罪モデル 原罪(アウグスティヌス)
罪の普遍性の議論 救いの問いの普遍性
- ・聖書における罪論の別のモチーフ
契約破棄 = 多神教への接近

2. 実体形而上学における罪の解釈

- ・量的罪概念
「実体」「量」としての罪 罪の大小
罰の大小
- ・救済の秩序 量的交換関係
教会、聖人の徳の分与

3. 関係概念としての罪

- ・関係存在としての人間: キルケゴール(人間 精神 自己 関係)
生成する自己
- 神 - 人間
個人 - 共同体・他者
人間 - 他の被造物
自己関係

- ・関係性の歪みとしての罪

4. sacrament

- 神の恩恵の形態化(実体 <ある> 生成・運動 <なる>)
 - ・聖霊の活動における自由と制度的限定
 - ・予言の終了、閉じた正典
- cf. 霊的熱狂運動

<文献>

1. キルケゴール 『死に至る病』(岩波文庫)
2. 坂口昂吉 『中世の人間観と歴史
- フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ - 』(創文社)
3. Jaroslav Pelikan, The Emergence of the Catholic Tradition(100-600)(The Christian Tradition 1), The University of Chicago Press 1971
4. 大林 浩 『死と永遠の生命』(ヨルダン社)